

府内沖の浜港と「瓜生島」伝説

Oquinofama harbor in Bungo and the legendary Island "Uryujima"

加藤 知弘

Tomohiro Kato

(1)

大分芸術文化短期大学客員講師パウラ・サントスさんが、ローマのイエズス会文書館から持ち帰ったマイクロフィルム（白杵図書館蔵）の中に、文禄5年閏7月12日（1596年9月4日）、豊後府内の南蛮貿易港沖の浜が地震と津波で別府湾に沈んだ事を報告した原文が入っていた。ポルトガルやスペインとの交流史の研究で、大きな功績を残された岡本良知氏が「近頃はローマに発信者の自筆書簡またはそれに近いもののあることが分かりましたから、日本風に言えば草書体で走り書きせられているので非常に難読ですけれども、それを利用せねばならぬでしょう。」（「続戦国時代の豊後府内港」）と述べられているものであろう。

岡本さんの言われる通りマイクロプリンターでコピーされた原文はまさしく難読であった。ただいくつかの点で確認できた事があるので、次に紹介しておく事にする。

先ず優れた記録者であるルイス・フロイス（Luis Frois）が、この信じられないような出来事で一家を失い、九死に一生を得たキリシタンのブラス（Bras）から直接聞いて記述した報告^①であるので、港町海没の事実は疑いもないという事である。報告は1596年日本年報補遺（12月28日付）としてローマのイエズス会本部に送られている。豊後地区布教長として豊後に4年余にわたって駐在し、五畿内への往来などで乗下船した事のある港町として沖の浜を良く知っていたフロイスは

Esta hum lugar maritimo serca de huma legoa de Funai, escala e porto de muitas embarcação que huma era grande villa por nome Oquinofama, (府内から約1レグアほど離れた海岸に、多くの船の寄港地であるオキノハマと呼ばれる大きな港町がある) と述べている。1レグアを5キロとすると他の文献（鄭舜功「日本一鑑」など）や彼自身の書いた他の記述よりも府内・沖の浜間がかなり長距離になっているが、多くの船の寄港地である大きな港町と述べていることから、わざわざ府内の外港を日出（速見郡日出町）に求めなくとも^②、沖の浜がその役割を十分果たしていたと考えられる。大友宗麟が受洗前に宣教師に語った追憶談にある「府内に近い港」（彼が16歳の時、初めてポルトガル人が中国のジャンク船で豊後に来航した事を語っている談話の中に出てくる^③）は、沖の浜のことを指すものと思われる。

府内の町や沖の浜を大音響と共に襲った津波の高さは、約7ブラサ、即ち14～5メートルに達した。沖の浜と同時に別府湾沿岸の土地の一部が沈んだが、それは浜脇（別府市）、津留（大分市）、日出、頭成（かしらなり、日出町）、佐賀関（北海部郡）などであった。大分川、大野川を津波は約1レグア以上も溯ったとも述べている。

(2)

南蛮貿易港沖の浜の海没がまぎれもない史実とすると、「瓜生島」伝説がそれに基づいて生まれたものであることは、「瓜生島」なる名称が最初に登場した時から、「または沖の浜」という但し書きがついていた事実^④によって、明らかである。ただ「瓜生島」という伝説的な名称がなんとなくロマンを感じさせるためか、余りに前面に出過ぎて沖の浜の史実が霞んでしまったと言えよう。「瓜生島」調査会が海底調査を始めた時、マスメディアや地元の人々からの質問は、「島があったか無かったか？」に集中していた。実は最近までうっかりと見落としていた重要なフロイスの記事があって、もし沖の浜と「瓜生島」が同一の土地の異称であるとするれば、「島ではなかった」と明言できる。それは前述したポルトガル語の引用文の中で、フロイスははっきりと、(沖の浜の港町は) *Esta hum lugar marítimo* 海岸にあったと述べているからである。フロイスは *ilha* (島)、*insula* (島) とわずに、海岸部 (*lugar marítimo*) という言葉を使用している。海岸から突き出た地形であれば、島と呼ばない事もないので、「瓜生島」との名称が後に使われた可能性はある。

ところで、沖の浜が存在していた当時の古文書には「瓜生島」の名称は見られない。さらになぜ後世の人々がこの港の所在地を「瓜生島」と呼ぶようになったかも、明かではない。文献上から、沖の浜と「瓜生島」の関係を整理してみることにする。

「瓜生島」という名称を記載する最も古い文献は、「豊府聞書」という地誌である。これは府内藩土戸倉貞則が古記録や古老の談話をもとに、社寺の縁起、遺跡、伝説、歴代府内城主などの事蹟を編纂した書物で、元禄12年(1699年)に完成しているので、文禄5年の大地震から103年経って書かれたものである。ただ残念な事に、この書物は序の部分を除いて原本も写本も現存していない。その代わり『豊府紀聞』(全7巻)という書物の写本数部が残っており、「豊府聞書」の内容をそのまま伝えるものと考えられる。『豊府紀聞』の伝える「瓜生島」海没のようを以下に要約して紹介する。

「慶長元年閏7月12日の晡時(午後2時または4時頃)、天下大地震。豊後もまた所々の地が裂け、山が崩れた。高崎山の山頂の巨石がことごとく落ち、その石が互いにつかりあって火を發した。地震は間もなく止んだ。府内の民はみな心身を安んじ、あるいは入浴し、あるいは夕食をとる者もいたが、まだ食べていない者もいた。

そんな時大海が大鳴動し、諸人ははなはだ驚き、どうしたんだと東西に走ったり、南北に逃げたりした。ある者は海の様子を窺っていた。村々の井戸はことごとく干上がってしまった。とみるまに大海に大津波がたちまち起こりて押し寄せ、府内と近辺の村々は水中となった。大津波は三時(さんとき、約6時間)に及んだ。一面海と化した府内の町では、神護山同慈寺の薬師堂が一つ、水面上に高く聳えているだけであった。同慈寺の仏殿は大きく傾き、境内の廟社などは流されて行方不明。その大殿の前には旅の船一隻が流れ着き、大豆を積んでいたが人は一人もいなかった。こうして大地震と津波によって府内の家々は大小にかかわらず大半が倒壊、人畜ともに死せるものの数はわからない。府内城の西北20余町(約2.2キロ)に勢家村があり、その地は高かったので人々はそこに避難した。勢家村の北20余町に瓜生島と名づくあり、あるいはまた沖の浜町という。その三つの町筋は東西に開き、家々はそれぞれの町筋に沿って南北に並んでいた。三筋の町並みは、南本町、中裏町、北新町と呼ばれ、農工商漁人が住んでいた。この瓜生島がことごとく沈没して海底となった。島の者で溺死しなかった者はわずかに

7分の1。ある者は小船で漂い、ある者は流れる家に乗り、ある者は浮木に取り付き、ある者は流れる櫃にすがった。彼らは海上をしばらく漂った後、西南の犬鼻あたりの岸や蓬莱山などに流れ着いて助かった。」(原文は漢文、平易に意識した)。

このように『豊府紀聞』の原文に「勢家村二十余町北有名瓜生島。或又云沖の浜」とある。大地震・津波で海没した「瓜生島」は、またの名を沖の浜町といった、というのである。幕末に『雉城雑誌』を編纂した阿部淡斎は、瓜生島址の項で考証をおこない、豊後の国の事跡について記載している国史・野史は少なくないが、「此島ノ所見ナシ。唯沖ノ浜トシテ、載タルモノ多シ。然ラバ沖ノ浜ト云ウヲ以、本名トモスベキカ」と述べている。事件から約100年後になって、何故『豊府聞書』が「瓜生島」の名称を書いたのか、その理由は不明だが、沖の浜の別称として使用(アンダーラインで示すように)していることは明確である。

なお『雉城雑誌』などが南蛮船来航の地として記載している神宮寺浦または神宮浦は、大分市歌でも歌いつがれ、神宮浦公園に建つ「南蛮貿易場址」の碑もこの名称に由来すると考えられるが、残念ながら諸外国の文献にこの名称は出てこない。沖の浜港の思い出がその海没後、この名称で継承されたものであろう。また「瓜生島」とともに別府湾に浮かんでいたが、慶長2年に海没したと伝えられる「久光島」は、フロイスの報告する浜脇の一部が沈んだ事が伝説化したものであろうか？

(3)

フランシスコ・ザビエルの研究者として著名なゲオルグ・シュールハンマーは、その著『Franz Xaver, sein Leben und seine Zeit』^⑤(フランシスコ・ザビエル、その生涯とその時代)の中で、ザビエルの府内訪問と滞在に関連して、沖の浜とさらに「瓜生島」の事に言及している。

彼はまずメンデス・ピントの『Peregrinaçam』^⑥(ペレグリナソン、日本語訳題名『東洋遍歴記』)の記述を問題にする。

「メンデス・ピントはドアルテ・ダ・ガマ船長の船(ザビエルは1552年1月29日付の書簡でジャンクでなくポルトガルのナウ船と明確に書いている)が錨を下ろしていた場所についての記事で矛盾した事を述べている。」と指摘している。即ちザビエルが2マイル離れた所まで来ているとの報告を受けた時、ポルトガル船は日出の港に停泊していたとしながら、船の停泊地から1マイルの距離にある府中(府内)にいた商人たちに知らせたと、ちぐはぐな事を述べているというのである。事実シュールハンマーの指摘するように、日出と府中は海上直線距離で7~8マイルはある。ただシュールハンマーはピントが1レグア(ポルトガルでは約5キロ、スペインでは約5.6キロ)と述べているのを1マイルと訳しているのだから、日出-府内間を3マイルとしているが、それでも船の停泊地を沖の浜であったとすれば、つじつまがあう。それにポルトガル商人たちは府中の町で船荷を交易していたとピントは書いているが、これらの船荷を積んでいる船が遠く離れた日出港に停泊していたとは考え難い。

さらにシュールハンマーはピントの「(豊後の国王に)謁見するため、ザビエル神父はポルトガル人たちを供に従え、本船のはしけで船着き場までいき、そこでカナハマの隊長の出迎えを受けた。(上陸してから)府中の町の九つの目抜き通りを行列を組んで行進、国王の宮殿まで行った。」という記述を引用、カナハマこそが沖の浜のことで、日出をフィンジエと呼ぶよ

うなピントの日本地名の数え知れぬ誤記の一つとしている。

ピントの沖の浜に関する記述を批判的に紹介した後、シュールハンマーは本論文冒頭で引用した1596年年報補遺のルイス・フロイスの報告、「豊後の国で起こった大地震と津波」を要約して述べている。多くの船の寄港地である大きな港町沖の浜が地震と津波で「その場所は深い海となってしまう、あたかも、以前陸地など存在した事がなかったように」。津波の高さは約14～5メートル。同時に海没した陸地は浜脇、津留、日出、頭成、佐賀関などなど。ただここでシュールハンマーは、この報告でフロイスは府内と沖の浜の距離を約1レグア（偶然にもピントと一致する）と述べているが、『日本史』ではより正確に約半レグアとしている、と注記している。

このフロイスの報告の要約に付け加えて、シュールハンマーは地元のキリシタン史に詳しいマリオ・マレガ神父（第2次大戦前から戦後にかけて、別府・大分に在住、キリシタン史の調査をしたサレジオ会の神父）が、「日本人たちの語り伝えるところによると、当地の沖合に寺社のある島があって、瓜生島と呼ばれていたが、この時の大波で（海中に）消えてしまった。現在、この島の名前の付いた寺が残っています^⑦。」と語って聞かせたと書いている。

ところでシュールハンマーが、日出と沖の浜の関係についてことさらこだわったのは、ジョアン・ロドリゲス（臼杵・府内のノビシャドやコレジオで学び、『日葡辞典』、『日本大文典』などの著書を出版、日本学の大家と言われた。ニックネームは通事）神父がその著『日本教会史』の中で、日出だけにポルトガル船が入港したように述べて、沖の浜については触れていない事から生じる誤解を懸念したためと考えられる。「その（豊後の）首府は府内 Tunay [Funay] または府中 Fuchu という都市である。この国には日出 Figi という港があり、ここに初めのころポルトガルの船（ナウ）が商取引のために来た。」（『大航海時代叢書』上巻 p.254）

「ところで山口 Yamaguchi の事情がこのような状態にあったころ、一隻のポルトガル船（ナウ）が豊後 Bungo の日出 Figi 港に着いた。この船には船長としてドゥアルテ・ダ・ガマが乗っていた。福者パードレ・フランシスコは山口 Yamaguchi で、日本人の商人を通じてその船の到着の報せを受けた。」

「ところで福者パードレ・フランシスコは豊後 Bungo の日出 Figi 港に着いた。ここは豊後 Bungo 国の首府府内 Funai の都市に近く、ポルトガル人たちの船（ナウ）が一隻ここに碇泊していた。」（下巻 pp. 481～492）。

このようにロドリゲスは、ドアルテ・ダ・ガマ船長の船は日出港に入港、ザビエル神父一行が別府湾沿岸に到着した時、ポルトガル船はこの港に停泊していたと書いている。このためこの時だけでなく、別府湾に来航したポルトガル船は毎度日出に入港・停泊していたとする意見がある。日出が府内の外港であったとする説である。この説は豊後国際交流史上で沖の浜港の果たした役割を、低く評価するもののようなものである。シュールハンマーは、ピントの日出港説への反論で、*Hiji lag nicht eine, sondern 3 portugiesische Meilen von Funai entfernt und war nicht der Hafen der Hauptstadt*（日出は府内から1レグア（ポルトガル・マイル）でなく3レグアの距離にあり、首府の港ではない）と述べて、豊後の首府の港は沖の浜であった事を強調している。

すでにロドリゲスと同様日出説をとるピントへのシュールハンマーの批判で述べたように、ガマ船長のポルトガル船はザビエル神父を迎えるために来航したのではなく、交易を目的として府内の町（大きな勢力を持つ大友義鎮のひざ元の町）にやって来たのであるとすると、船が

日出の港に停泊していたという話は、大いに疑問がある。大分市と日出町は別府湾をはさんだ対岸にあって、海上を直進しても12～4キロ、陸路をとれば別府湾沿岸を大きく迂回することとなる。約半年間船を停泊さしての生糸・絹織物と銀を主とする府内の町での交易の拠点に、わざわざ日出港を利用したとは考えられない。

ところで、ロドリゲスが『日本教会史』を最初に脱稿したのは1622年であったが、その後も増補改訂を行い、死去するまで明朝への協力の傍ら編纂を続けたという^⑧。「『日本教会史』は未完である。」。ただ「ザビエルが宣教を開始した当時から書き始めるとなると、自分が日本に来る二十年も前の記録を反覆しなければならない。」「初代の宣教師たちが書いた限られた数の手紙や記事に頼るほかなかったのである^⑨。」。彼は1610年長崎奉行長谷川左兵衛らの策謀で日本から追放され、マカオで暮らすようになってから10年目、『日本小文典』を刊行してやっと『日本教会史』の編纂に取り掛かっている。沖の浜が海没してからすでに24年、ザビエルの府内訪問からは69年経っていた。マイケル・クーパー師の述べているように^⑩、日本文化の紹介の記述は「多くの点でむしろ傑作」であっても、「ザビエルの渡日と活動について語る箇所などを読んでも別にうるところがなくてがっかりするだけである。」という評価が正しいとすれば、詳細で優れた記録者ルイス・フロイスが「多くの船の寄港地でオキノハマと呼ばれる大きな港町」と述べている港こそが、ポルトガル船の停泊地であったろう。ザビエルの到着を日出港に停泊して待っていたと書いたピントも「乗船すると、この府中の町を出発し」と次に述べているので、岡本良知氏が「一五五一年に初めて豊後に渡来したポルトガル船が、始めは日出へ、後には府内に極く近い一港へ入ったとすれば、それは後の四度のポルトガル船の場合になかった異例であるから、そこに何か理由があったのであろう。例えば、豊後へは初めてのことから、府内へ向かうコースを間違えて日出に着いたとか、または府内に騒乱があったので一時的に日出へ避難したとかいうなことである^⑪。」と述べられているのが、事実であろう。岡本氏の主張されるように日出入港が例外的でなければ、日出が府内の外港であったことになり、「瓜生島」伝説との接点なくなる。フロイスも沖の浜港海没の事実をあれだけの力を込めて書く事も、おそらくなかったであろう。このように考えてくると、ザビエルが到着した時、ガマ船長のポルトガル船は沖の浜に停泊していたとするのが、真実のようである。

ただシュールハンマーは、マレガ神父から「瓜生島」伝説の話聞かされたけれども、それと沖の浜海没の事実とを重ね合わせて考えることまではしていない。その事は、「府内古地図」をもとに彼が描いた「府内図」（掲載図参照）に Okinohama Hafen と Uri-u-insel (8) が別々に書き込まれていることから分かる。

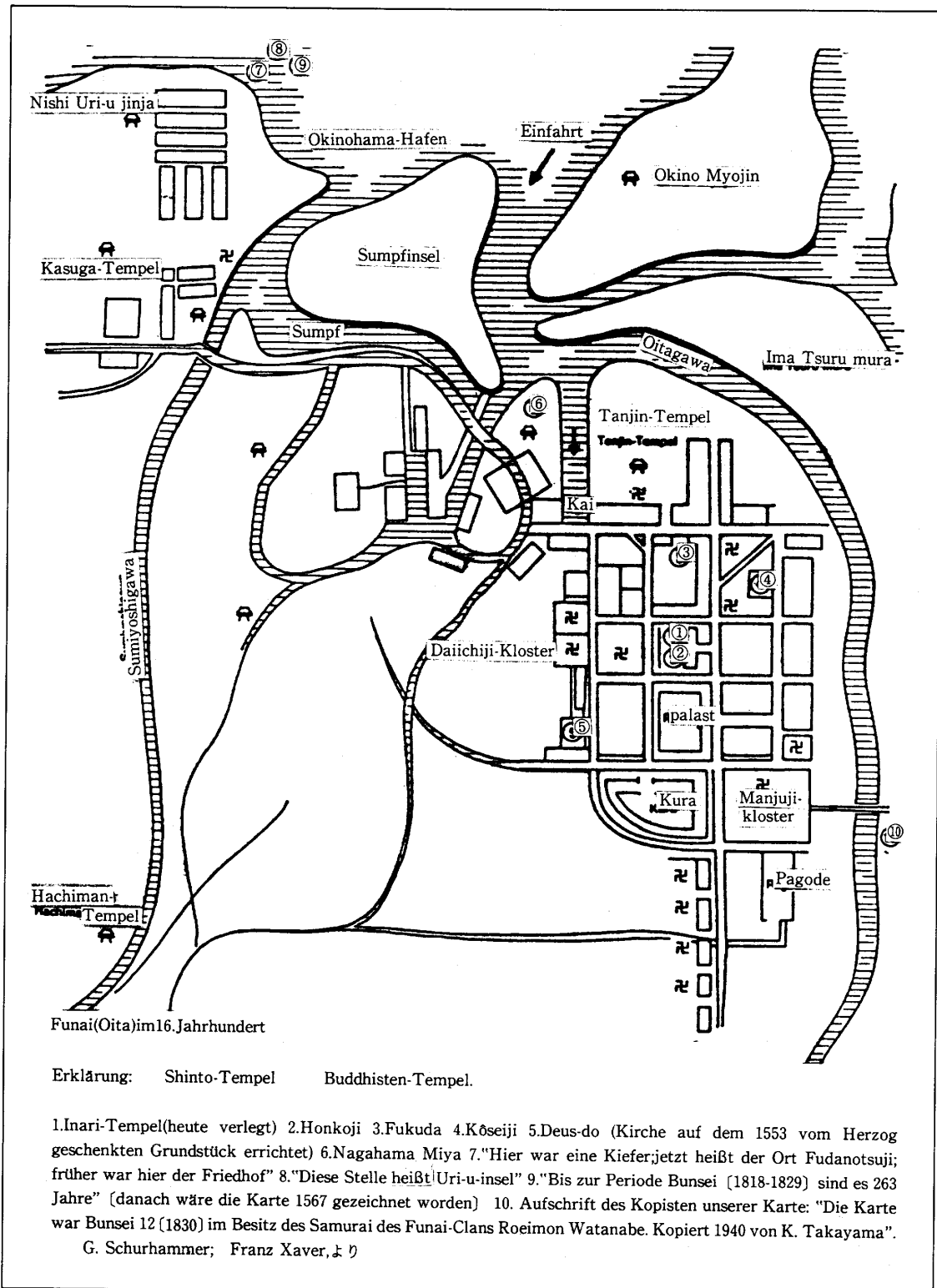
(4)

沖の浜港と「瓜生島」を結び付けて考察する事を試みた最初の学術論文は、筆者の知る限りでは岡本良知氏の「戦国時代の豊後府内港」であろう。この論文は一、九州東部沿岸外国船渡来路程、二、豊後に於ける海外貿易港、三、府内と沖の浜、といった節で構成されており、各節のタイトルに従って日本、中国、ヨーロッパの文献を駆使して考証がおこなわれている。しかし焦点はなんといっても豊後府内港に絞られており、別府大学に在職されたことのある岡本氏の論述は、具体的で詳細である。

ところで、沖の浜と「瓜生島」との関連について、岡本氏は次のように述べておられる。少

し長くなるが、原文まま引用してみることにする。

「沖浜部落が、府内と接続する陸地にあったのか、それとも狭い海を隔てて瓜生島と称せられた島の一部を占めたのか、その位置と地勢とによって府内に対する関係も幾らかは違って来



府内沖の浜港と「瓜生島」伝説

る筈である。鄭舜功が前記の如く、陸行五・六里の間を騎馬して沖浜から府内へ赴いたとその経験を語ったのは、陸続きであったことの証言と認むべきである。これと反対に、一五五一年のフランシスコ・シャヴィエール一行も、一五五六年のベルシオール・ヌーネスも本船から小舟で川を溯って府内へ上陸したと報じたのは、島であったことを立証するものであろう。これを憶測すれば、干潮のときには府内の町と沖浜のある陸地との間の海が干し上って陸続きとなり、逆に満潮のときにはその陸地は島となったのかも知れない。然しそれも仮の想像であって、容易にそれを断定することができない。」

ここで岡本氏は沖の浜と「瓜生島」を結び付けて考えながらも、港町が島にあったのかなかったのか、容易に断定することはできない、と述べておられる。それにこの一文には注釈が付いていて、「近世に到ってこの島に就いては種々の論議が行われたし、また今も行われている。最も極端なのは曾てその存在したことをさえ疑う説がある。わたくしは、沖の浜のあった陸地が瓜生島の名で称ばれたかどうかの問題にはここには触れない。それに就いて阿部淡斎が「(略) 国史野史ニ (略) 唯沖ノ浜トシテ載セタルモノ多シ。然ラバ沖ノ浜ト云フヲ以、本名トモスベキカ。」(雉城雑誌、巻八)と推論したのが当を得ているかも知れない。兎に角、この論文では瓜生島の名に拘わらず、慶長元年までの沖浜の陸地を確認すればこと足りるからである。」と述べて、慶長元年(文禄5年)まで南蛮貿易港でもあった沖の浜港が存在していた事実を強調されている。

「瓜生島」に関して岡本氏は「その(島)存在したことをさえ疑う説がある」として、さらに「後世に曾て存在した瓜生島の姿を復元したといわれる数種の地図が作られているが、『豊府古蹟研究』(注 市場直次郎その他著、昭和6年刊)の著者達が種々の点からそれに論難したことがある」と付け加えられている。これらの事から岡本氏が「瓜生島」伝説は沖の浜港とその海没の事実を程度の差こそあれ脚色したものだ、との結論を出す事に躊躇されたのであろう。事実「瓜生島」調査会が1977年から海上調査に取り組んでからも、調査そのものに対する周囲の懐疑的空気は強く、マスコミが大きく報道することを冷笑する声さえあった。

(5)

沖の浜海没の記述も「瓜生島」海没の記述も、同一時期に同一場所で発生した自然大災害を共に記録したものであるというほぼ明確な推定は、文献資料からも可能である。

まずすでに紹介した「瓜生島」海没を述べた『豊府紀聞』の記事と、『津山氏世譜』(岡藩主中川家家臣津山氏の家譜、柴山から津山と改名した)の船奉行柴山勘兵衛(沖の浜は当時岡藩の飛び地になっていた)の遭難記、フロイスの報告する沖の浜のプラス(ザビエルから洗礼を受けたキリシタン)の遭難記(両史料とも沖の浜名のみ記す)とを比較してみよう。

「同月十三日(注 原文には慶長元年とあるが、10月に改元になっているので正確に言うと文禄5年閏7月13日、『柴山勘兵衛記』では9日になっているが、このように日付けに少し食い違いがある。)昼頃より大地震にて、大波ゆり上り、居宅海中となる。重成室出産以後六日目のことなれば、血はいまだ治まらず、出生の小児を抱いて、夫婦ともに天井に上る。天井にも水上るゆえ、脇差しにて屋(根)萱を切破りて二人ともに屋根の上に上がる。系図ならびに感状の箱と槍を持って上る。もはや屋根も流れんとする時に、かねて船を作らんとて調え置きたる船板の七尋ばかりなるが流れよりければ、これを幸に二人とも乗り移り、槍をも箱をも放

さず持去れども、引汐に沖に引出されて、幾度も波に打ち込まれんとす。この時男一人小舟を漕ぎ来て、これに乗り給え、助け申さんと言う。二人ながら嬉しくて、この舟に乗り移り、系図の箱も槍も取り乗て、南を指して漕行く。」この後、今津留の浜に二人は降ろしてもらったが、ここも大波に崩れて人家もなくなっていた、暫く歩いてからやっと難を免れた人家を見つけ、ここの地名とそこにあるお宮の名を尋ねてから休息した、と述べている。

一方沖の浜の住民でキリシタン・ブラスの遭難体験談は、次のようにフロイスによって報告されている。

「豊後で起こった地震は非常に大きくて恐るべきもので」、その後やって来た津波は、「ある夜突然何ら風にあおられるのに、その地へ波が二度三度と（押し寄せ）、非常なざわめきと轟音をもって岸辺を洗い、町よりも7ブラサ以上（約15メートル）の高さで（波が）打ち寄せた。（略）そこで同じ勢いで打ち寄せた津波は、1レグアあるいはそれ以上（松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』「1596年度年報補遺」の訳文では、およそ千五百歩以上も、となっているが、フロイス原文では1レグアあるいはそれ以上 *huma legoa ou mais* とある）も陸地の内部に押し寄せ、波がひいた時沖の浜の町のなにもものも残さなかった。その場所の外にいた人は助かったが、あの地獄の深淵が掴まえた人々はすべて呑みこまれ、連れ去られた。男、女、子供、老人、牡牛、牝牛、家、農地^⑩その他いっさいのものが持ち去られ、そこにかけて陸地などなかった如く、深い海に変わってしまった。」

このように、柴山勘兵衛の遭難記録や沖の浜のブラスの遭難記録を読んでも、『豊府紀聞』の「瓜生島」海没の記述と同一の別府湾沿岸で発生した自然大災害について述べている、としか考えられない。大地震と大津波で港町がそのままそっくり海底に没してしまうような事件が、そう度々起こるものではない。ただ一方が島と呼び、もう一方はただ沖の浜の呼称しか使っていないだけである。後世になって野史や伝説が島と呼ぶに至った理由がそれなりにあったと推定される。ただここではその理由らしきものは後で述べることにして、次に沖の浜の呼称だけを用いる史料と「瓜生島」の呼称を用いる史料が、それぞれ府内と沖の浜または「瓜生島」の距離・方角をどのように記述しているか、比較してみることにする。

先ず『豊府紀聞』は、府内城（荷揚城または雉城とも呼ばれた。慶長7年頃完成）の「西北20余町」に勢家村（大分市勢家町）があり、「瓜生島」は勢家村の北「20余町」にあったと書いている。これを直線距離にすると、府内城の「西北31町40間（約3.2キロ）」に「瓜生島」は位置していた事になる。

弘治元年（1555年）、明使鄭舜功は倭寇の禁圧を要請するため、豊後に来航して大友義鎮に謁見した。日本の国情調査をも命じられていた彼は、その後2年間豊後に滞在、帰国後『日本一鑑』を書いている。その中に沖の浜に入港して「馬に鞭打ちて、往きて豊後の君（大友義鎮）に見（まみ）ゆ」とか、「府内に陸行するに、およそ5、6里（中国里、1里は約600メートル）」とか述べている。いずれの文章からも沖の浜が地続きであった事が知られるが、彼がわざわざ陸行すればと断っているところを見ると、普通は府内へは小舟に乗り換えて行くような地形の所に港があったと考えられる。後世の人が島と呼んだ理由を推察させるものである。いずれにしろ、沖の浜・府内間の距離は陸路を行けば3～3.6キロあったことが分かる。

オランダの旅行家リンスホーテンは、インド滞在中に収集した記録資料を整理して、1595年アムステルダムで『ポルトガル船航海路程記』を出版した。岡本良知氏の同書からの引用によると、沖の浜港は大分川河口付近に所在したとある。ただし当時の大分川河口は現在よりも大

きく西に寄っていたことが、江戸期の絵図からも分かる。前述のようにフロイスは沖の浜・府内間の距離を1レグアと述べているが、『日本史』では半レグアとも書いている。これに従うと2.5～5キロとかなり幅があるが、鄭舜功の述べている数字と突き合わせると3～3.5キロがほぼ妥当と考えられる。

こう見てくると、「瓜生島」呼称の史料と沖の浜名称の史料とも、所在方向は府内の西、府内との距離は3～3.5キロとほぼ重なって来る。

次に大地震・大津波で島あるいは港町が海没した年月日であるが、『豊府紀聞』や『雉城雑誌』などが慶長元年（文禄5年）閏7月12日（1596年9月4日）とするのに対して、『津山氏世譜』『柴山勘兵衛』は同年同月13日または9日と述べている。ただ沖の浜として記述する史料で日付が最も確実と考えられるのは、フロイスの報告であるが、残念ながらこれには日付が記載されていない。ただこの前後に近畿地方などで発生した地震に就いての報告には、明確な日付を記載しているものもあるので、それからある程度の推定が可能である。

8月30日夜、9月4日真夜中、大阪、京都、堺地方で大地震発生、9月5日夜は一晩中、伏見、山崎、尼崎、兵庫、淡路、大和郡山なども地震被害。9月7日夜から12日間大きな余震が続いている。九州地方で地震被害をうけた地域として長崎、加津佐、千々石、有家、矢部の名前が挙げられているが、これは豊後を中心に起こった地震であろう。これら近畿地方の地震と連動した地震と考えると（その記載の仕方から言っても）、9月4日または5日の可能性が最も高い。とすれば『豊府紀聞』の慶長元年閏7月12日（太陽暦の1596年9月4日）という日付や『津山氏世譜』の閏7月13日という日付とほぼ一致する。島や港町の高没といった大事件がそう立て続けに起こる筈もないので、9月4日か5日に発生した同一事件を記述したものと考えられる。

以上見てきたように、発生した災害の経緯、島なり港町の所在位置、災害発生の年月日に就いて、沖の浜とのみ記述する史料も「瓜生島」の呼称を用いる史料も、ほぼ一致した事を書いている。「瓜生島」が沖の浜に後世の人々が与えた別称であって、港町の所在した地形が海岸部から突き出た場所であったので、「島」と呼んだのだと考えざるを得ない。ただ「瓜生」なるが名称が「瓜生山威徳寺」^⑧に由来するのかどうかは不明である。

(6)

こうやって文献上から沖の浜港の位置が特定され、その一帯の海底調査を行えば、「瓜生島」の謎も同時に解明できるとの推定を得たので、調査を実施することにした。

昭和52年9月と昭和55年6月の2度にわたって、当時としてはきわめて珍しかった音波探査機による海底地層探査を勢家町の沖合で実施した。われわれが使用した音波探査機は、調査船の曳航するフロートから音波を発振し、海底下の各地層に反射して戻って来る音波をコンピューターで読取り、船上の受信装置のチャートに刻々と記録していくものであった。音波の届く海底面からの深さは比較的浅く約60～70メートル、ただこの深さまでの海底下地層は克明正確に記録するものであった。この時の調査の結論だけを述べると、次のようである。

西大分港突堤赤灯台北の調査船の各出発点からある地点までは、4測線（赤灯台より北へ0.5キロ、1キロ、1.5キロ、2キロ）とも煉瓦を積み重ねたような整然たる堆積層を示しているが、それを過ぎると乱層となり、船の反転地点付近で再び整層に戻る。この住吉泊地から春

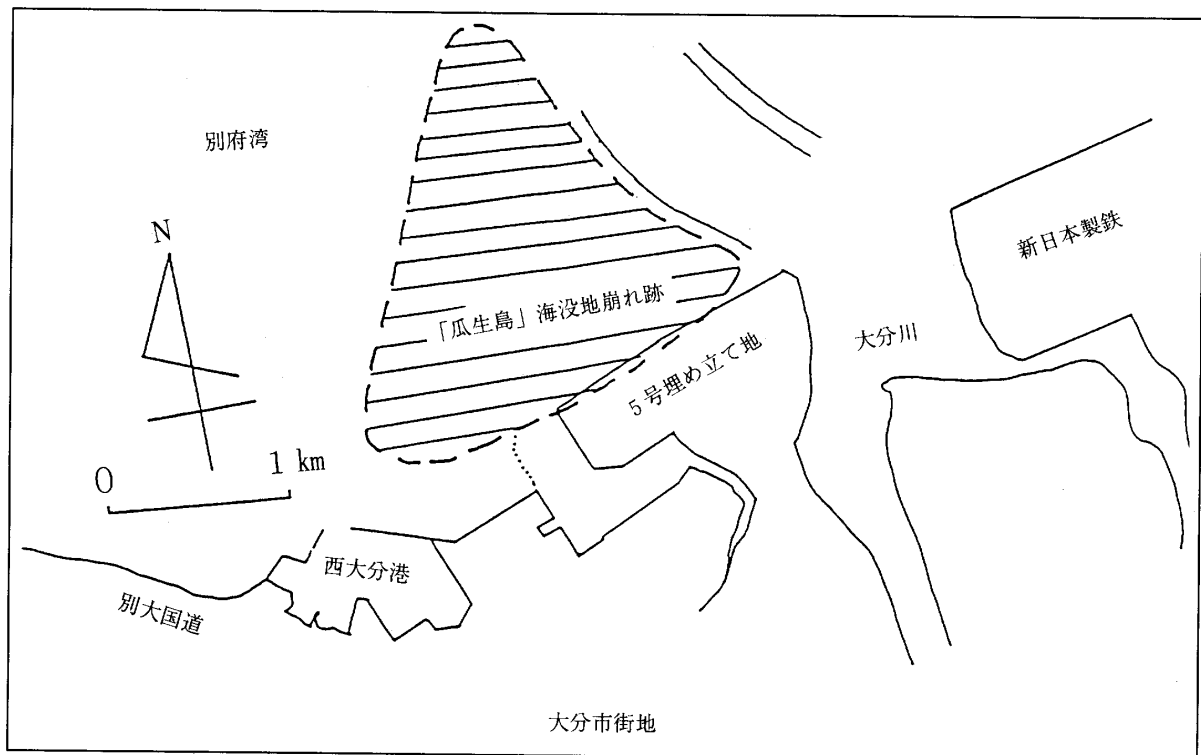
日浦埋め立て地沖の海底に見られる乱層は、大きな地崩れの跡と考えられ、かつて存在した陸地が何らかの原因で崩壊し、海底面を土石流となって滑り落ちたものと推定される。

この推定をさらに裏付けるため、岸壁に平行に走行させた調査船を、岸壁に直角に走行させた。別府湾南岸の海底地形は、少し遠浅でその先は急斜面になり、40～45メートルの水深^④の所あたりから平板になっている。地崩れは大きな土石流となって急斜面を滑り落ちていったと考えられるので、その海底面を縦に切る方向に調査船を走行させれば、乱層は海底が平板になる付近で終わる筈である。

結果は予想された通り、海底下の地層は、斜面から平板な地形に移る付近で乱層から整層に変化、そのまま40～50メートルの水深が続いた。その後調査船を90度回転させて暫く岸に平行に走らせた後、今度は船首を岸に向け、往路と平行に走った。これも予想通り整層の後、海底が斜面に変わる付近から乱層に変わり、岸壁付近まで続いていた。

幕末の府内藩の学者阿部淡斎は、彼の編纂した『雉城雑誌』の中で前述したように「沖ノ浜ガ瓜生島ノ本名ナラン」と書いているが、さらに「此島没入ノ後モ、猶当町春日社ノ北裏ニ掛テ、十余丁ガ程モ、寄洲ノ地続ニシテ、其六、七丁計（ばかり）ニハ、七本木ト云地モアリ」と勢家の北に享保年間（18世紀前半）の頃まで砂州が沖に延びていたことを述べている。これは古老から直接聞いて書いたものなので、信頼が置ける。

海底調査の結果とこの阿部淡斎の記述は、われわれの文献上からの推定とほぼ完全に一致するものである。「瓜生島」伝説は、沖の浜海没の史実を下敷きにして、語り継がれて来たものと考えて間違いのないと言える。



府内沖の浜港と「瓜生島」伝説

注

- ①ルイス・フロイスは1592年10月ヴァリニャーノ巡察師に従ってマカオに渡ったが95年長崎に戻った。沖の浜のプラスの体験談は長崎で聞いた。この報告をローマに送った翌年97年7月8日に死去している。
- ②『日出町史』などで南蛮船来航の地として日出港が強調されている。
- ③宗麟は1530年（享禄3年）生れであるので、満年齢で15歳としてポルトガル人の初来航は1545年（天文14年）の事と考えられる。「大分市歌」などで南蛮船来航の地として神宮寺浦の名が出て来るが、この名称はフロイスの『日本史』などには見当たらない。
- ④幕末に『雉城雑誌』を編纂した阿部淡斎は、瓜生島址の項で「此島ノ所見ナシ。唯沖ノ浜トシテ、載タルモノ多シ。然ラバ沖ノ浜ト云ヲ以、本名トモスベキカ」と述べている。
- ⑤G. Schurhammer ; Franz Xaver, sein Leben und seine Zeit, Freiburg-Basel, 1973.
- ⑥この書物でピントの述べていることの信憑性に付いては、ジョアン・ロドリゲスのように「むしろ人を迷わす巧妙な作りごと」（『日本教会史』）として、全く否定的な意見があるが、記事の根底には脚色、誇張されてはいるがちゃんとした事実が存在する事が多い。他人の体験を自分の体験として語ったりしているが、全く架空の話しでもない。（拙著『ザビエルの見た大分』参照）
- ⑦大分市勢家町瓜生山威徳寺のこと
- ⑧明朝末期北方からタタール（後の清朝）の脅威に対抗するため、明朝はポルトガルの協力を要請した。中国語に精通したロドリゲスもこれに参加、毅宗皇帝から感状を受けている。
- ⑨これに比してフロイスは豊後地区上長を4年以上務め、沖の浜から度々乗下船した事があり、『1597年年報補遺』の記事はその記憶の生々しい時に書かれている。
- ⑩Michael Cooper ; Rodrigues the Interpreter, Tokyo-New YORK, 1974.
訳は松本たま訳によった。
- ⑪岡本良知「戦国時代の豊後府内港」（『大分県地方史』第10号）1956.
- ⑫フロイス原文では fazendas となっているが、このポルトガル語には農地と財産の両方の意味がある。牡牛、牝牛、家と並んでいるので、農地の可能性が高いように感じられる。
- ⑬大分市勢家町にある浄土真宗の寺「瓜生山威徳寺」、由来記に瓜生島にあった一向宗道場が遭難、現在地に再建されたという。遭難の時仏崎に流れ着いたという木彫りの仏像、汐入りのご文書などが保存されており、住職は瓜生姓を名乗っている。
- ⑭別府湾の最深部は高崎山沖、約73メートル。